

多くの民を救った血

[聖書] 出エジプト記 12章 21～33節

モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。また、主が約束されたとおりのあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」民はひれ伏して礼拝した。それから、イスラエルの人々は帰って行き、主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

真夜中になって、主はエジプトの国ですべての初子を撃たれた。王座に座しているファラオの初子から牢屋につながれている捕虜の初子まで、また家畜の初子もことごとく撃たれたので、ファラオと家臣、またすべてのエジプト人は夜中に起き上がった。死人が出なかった家は一軒もなかったので、大いなる叫びがエジプト中に起こった。ファラオは、モーセとアロンを夜のうちに呼び出して言った。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい、あなたたちもイスラエルの人々も。あなたたちが願っていたように、行って、主に仕えるがよい。羊の群れも牛の群れも、あなたたちが願っていたように、連れて行くがよい。そして、わたしをも祝福してもらいたい。」エジプト人は、民をせきたてて、急いで国から去らせようとした。そうしないと自分たちは皆、死んでしまうと思ったのである。

[序] オバマ新大統領への期待

47歳の黒人バラク・オバマさんが第44代米国大統領に就任しました。父はアフリカのケニアからの黒人留学生、母はカンザス州生まれの白人で、ハワイで出会い、オバマさんが生まれました。ところが両親が離婚、母はインドネシア人と再婚し、オバマさんは6歳でインドネシアのジャカルタに移り、ムスリムの友達と遊びました。10歳でハワイに戻り、母方の祖父母に育てられます。

ハワイは日系・中国系・白人・黒人・先住民が一緒に暮らす多様性の島で、異なる人種・民族に寛容な「アロハ・スピリット」が自然と身につきました。高校を卒業後、アメリカの本土に移り、ロサンゼルスでカレッジを、ニューヨークで大学を卒業し、シカゴの貧

民街で地域活動家になります。それからハーバード法科大学院に進学し、36歳でイリノイ州議会上院議員になり、政治家の道を歩み始めました。そして43歳で連邦上院議員に当選。その2年3ヶ月後に、民主党の大統領候補者選定の選挙戦に名乗りを上げ、本命と思われていたヒラリー・クリントン候補を破り、大統領戦も勝抜いて、47歳で大統領に就任したのです。

黒人と白人の血が流れている自分。小さい時からハワイとインドネシアという多様な文化の中で色々な人種の人と一緒に教育を受けて育ち、最後はアメリカ本土でコロンビア、ハーバードという有名大学を卒業したのですから、自己を確立していくに当たって、自分は一体何者なのかという迷いがあったのではないのでしょうか。

私たちですと、多様で複雑な影響を色々と受けると、それらをどうまとめて身につけたらよいか戸惑い、混乱してしまいがちです。ですから子どもの教育を考える時にも、なるべく同じような育ちの子どもが集まる学校で学ばせようとしがちです。日常生活にしても同じようなレベルの者でグループを作り、その中に身を置いて安住しようとしがちです。

ところがオバマさんは、シカゴの黒人貧民街に身を置いて、差別と貧困が生み出す生々しい現実と向き合い、社会の底辺で呻く一人ひとりの苦しい暮らしの、改善・向上に取り組んだのです。そしてその時に黒人としての自己理解が確立し、また信仰が深まっていったようです。こうして何等かの差別を経験してきた人たちに、アメリカはこれから変わるという期待を抱かせるバラク・オバマというユニークな人格が、造り上げられてきたのでしょう。

彼は自分の内に抱える多様性を積極的に捉えたのと同じように、アメリカ合衆国そのものを捉えて、こう言っています。「私たちの国はキリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、そして無宗教者からなる国家だ。世界のあらゆる所から集められた全ての言語と文化に形作られたのが私たちだ。この多様性という遺産は、私たちの強みだ。」

また「憎悪や人種の境界は消え、共通の人間性が姿を現すことを信じる。」「国家の安全は、謙虚さと自制心から生まれる」と述べ、イスラム世界に対して、「私たちは、共通の利益と相互の尊敬に基づき、新たな道を模索する」と呼びかけています。このような大統領と共にアメリカ国民が、内に抱く人種差別を克服し、世界各国と協調して、新たな平和の時代を導く役割を果たして欲しいと祈らざるを得ません。同時に、平和な世界の実現に向かって、私たち日本人の果たすべき役割は何かを、改めて考え

させられました。

[1] エジプトに下った神の裁き

さて私たちは、1月から3月までの3ヶ月間、出エジプト記によって、イスラエルの民が、エジプトの奴隷の境遇から解放されて、シナイ半島を横切り、アブラハムが神さまから約束されたカナンの地に戻っていく歴史の節目を学び始めています。神さまは、モーセを指導者として立てて、エジプト王との交渉に当たらせました。

このモーセも、オバマ大統領同様に多様性の中で成長した人物です。両親がヘブライ人でありながら、エジプトの王女に拾い上げられ、モーセというエジプト風の名前を付けられ、エジプトの最高の教育を受けて成人します。しかし不思議なことに、エジプトの王宮で育ちながらも、ヘブライ人であるという自覚を強く持つようになり、ある日遂に同胞を虐待するエジプト人を殺してしまいます。その結果王宮に居られなくなり、シナイ半島の彼方に逃げます。ミディアン人エテロのもとに身を寄せて、その娘と結婚して、羊飼いになりました。モーセの人格はヘブライ人、エジプト人、ミディアン人という多様な文化の中で形成されたのでした。

モーセは神さまの指図に従ってエジプト王と交渉しました。しるしや奇跡を10回も行なって、神さまの御心と力を現したにも拘らず、国王は心を頑なに立て、モーセの申し出を聞き入れませんでした。150万を超える奴隷を失うことは、国家にとって大損失です。世界の大国エジプトが、奴隷の民イスラエルの神の言うことに、どうして聞き従う必要があるかという自負が、強かったからでしょう。

しかし国王は、モーセを通して語りかけておられる神さまが、全世界の主である神さまであり、従って自分は主に聞き従うべき僕であることに、理解が至らなかったのです。神さまは遂に、エジプト中の家々の初子の命を、一夜のうちに取り上げてしまう裁きをお下しになりました。モーセはイスラエルの民に神さまの命令を伝えます。

「この月を一年の初めの月、正月とし、14日の夕暮れに、傷のない1歳の小羊を屠り、その血を各々の家の入り口の柱と鴨居に塗りなさい。そして翌朝まで誰も外に出るはならない。エジプトの全家に下す裁きが、血のしるしのある家を通り過ぎる」。真夜中にエジプト中の家の初子が死に、嘆き叫ぶ声が全土を覆いました。しかしイスラエルの民の家は守られました。

国王は、モーセとアロンを夜のうちに呼び出して言いました。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい、あなたたちもイスラエルの民も。あなたたちが願っていたように、

行って、主に仕えるがよい。羊の群れも牛の群れも、あなたたちが願っていたように、連れて行くがよい。そして、わたしをも祝福してもらいたい」。こうしてイスラエルの民の大集団は、おびたしい数の羊、牛、家畜を連れて、紅海目指して出立できたのでした。

国王との厳しい交渉に取り組むに当たって、神さまはモーセとアロンの二人にこうおっしゃいました。「わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人々をその中から導き出すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる」(7:5)。エジプト中の初子の命を失って、やっと主なる神さまのみ業が分かるとは、何と情けないことでしょうか。神さまを主と認めて聞き従うことがなかなか出来ない心の頑迷さを、私たちも大なり小なり持ち合わせています。よくよく心しなければなりません。

[2] 十字架に死なれた神の小羊

こうして神の民イスラエルは、エジプトの奴隷の身分から解放されて、カナンの地に戻ることに許されました。もともと後で心変わりした国王は、この奴隷集団を取り戻そうとして、戦車・騎兵の精鋭部隊に追跡させましたが、紅海を渡る所で、全部隊を溺死させてしまいます。この話は、来週学びます。

いずれにせよイスラエルは、惨めな奴隷の境遇から解放されました。以来彼らはエジプト脱出の月を正月とし、過ぎ越しの祭りを一番大事な祭りとして守り続けて来ている。その祭りの中心は、正月の14日の夕暮れに傷の無い1歳の小羊を屠り、その血を家や天幕の入り口に塗り、家族皆で肉を食べる儀式です。中心のメッセージは「小羊の血によって主の裁きが我が家を過ぎ越し、初子は守られ、奴隷から解放された」です。

イスラエルの親たちは、初子を失う悲劇を免れました。子供の命を救ったのはイスラエルの親たちの必死な愛ではなく、門柱に塗られた小羊の血のしるしのお蔭でした。奴隷の民の大集団が、不可能と思われたエジプトから解放されたのも、武力によってもなければ、産業技術の力とか、経済力が優ったからでもありませんでした。小羊の血が、国王に神さまの愛と裁きを示したからに他なりません。

歴史は進み、モーセによる出エジプトから1300年ほどたちました。紀元29年頃のことです。当時ローマ帝国の支配下にあったユダヤで、過ぎ越しの祭りの最中に、イエス・キリストがエルサレムのゴルゴタの丘で、十字架に付けられ、「父よ、彼らをお赦しください」と祈りつつ、血を流して死なれたのでした。

イエス・キリストは三日後に墓から復活して、失意に沈む弟子たちに現れ、彼らの信仰を復活させられました。弟子たちは、昔、出エジプトの時代、エジプトの奴隷になっていたイスラエルに解放をもたらした過ぎ越しの小羊と、過ぎ越しの祭りのただ中で、十字架に付けられて血を流して死んでいかれたイエス・キリストとを、重ね合わせて受け取るようになりました。

そして、小羊の血が奴隷を救い出したのだから、イエス・キリストが十字架上で流された血汐により、私たちも罪の奴隷から確実に解放され救い出されたのだ、イエス・キリストこそ、罪の奴隷から私たちを解放してくださる神の小羊・救い主だと信じる福音信仰を確立したのでした。

イスラエルの民は、小羊を屠って血のしるしを家の入り口の柱と鴨居につけました。私たちも、私たちの罪をご自分の身に一切引き受けて十字架にかかり、私たちに代わって罪の裁きを受けて下さり、赦しをもたらしてくださったイエス・キリストを、自分の救い主と信じて告白する時、イエス・キリストは私たちに十字架の血のしるしをつけて下さいます。この血のしるしのゆえに、私たちの裁きは過ぎ越し、罪の支配から解放され、神の民として生きる恵みを頂けるのです。

[結] 命を貴ぶ

或る人が、母親の愛を知らずに育ち、世をすね、人を呪って、犯罪者に落ちぶれてしまいました。彼の新聞記事を読んで、一人の婦人が警察に訪ねて来ました。そして彼が生まれた時の状況を語ったのです。医者診断では、生まれる子と母体を両方助けることが出来ない。どちらかを助けることで精一杯。どちらを助けますか？ 父親は妻を救おうと願いましたが、妻のたつての願いで、子どもの命が守られ、子の母親は命をおとしました。これを聞かされて、彼は泣き伏してしまいました。このような人生しか送れずに、母の犠牲を無駄にしてしまった親不幸を、深く後悔したからでした。

私たちは自分を粗末にはなりません。命を粗末に扱ってはなりません。私たちは親をはじめ、どれほど多くの方から、愛と犠牲を頂いてきたことでしょうか。神さまも「わたしの目にあなたは値高く貴い」(イザヤ43:4)と語っておられます。その貴い人格を卑しくしているのが罪です。私たちは十字架の死を、無駄にしてはいないでしょうか。

イエス・キリストが流された十字架の血の救いを信じて、受け容れましょう。そして罪の奴隷から解放されましょう。互いに命を貴び合い、愛し合い、仕え合って、後から来る者に、より良い世界を手渡していくよう、励みましょう。

完